

歴史上の女性たち： フローレンス・ボイントン



フローレンス・ボイントン、松方美代とその子供たちと共に。
西町インターナショナルスクール 提供。

巣立ちまもない日本のキリスト教科学を
育んだ女性

フローレンス・ボイントン(1876-1942)は、サンフランシスコ沿岸地域出身のすぐれた教育者であり、彼女は、自分を「生まれながらの教師である」と語っていた。生徒たちによると、彼女は、身だしなみが良く、美しい「マルセル式ウェーブ」の髪型で、栗色の目をした、ユーモアがあり、音楽のような声をして¹いた女性であった。彼女は厳格で、しつけの厳しい人であったが、また母親のように温かい人でもあった。彼女は生徒たちに常に優れていて欲しいと願っていた。彼女は子供たちに、「すべき価値のあることは徹底的にしなくてはならない」と教えて²いた。

ボイントンは、未婚で、冒険心を持っていた。彼女は1901年から1902年にかけてサンフランシスコに住んでいた。そして1911年頃、アメリカ人のビジネスマンの4人の子供の家庭教師として東京へ渡航することに同意した³。この任務が終了したとき、アメリカに戻り数年間過ごし、その後ある中学校で教えるために1915年に日本に戻った。

二度目の訪日で、ボイントンは30年間近く日本で過ごすことになり、日本は彼女にとり第二の祖国となった。この間、日本における最初のキリスト教科学者たち数人と知り合った。彼女は彼らの子供たちも大人たちも教育するという役割を担っていたが、これが日本における**キリスト教科学**の歴史に未永く残る遺産となった。

-
- 1) Emi Abiko, *A Precious Legacy: Christian Science Comes to Japan* [貴重な遺産：キリスト教科学日本に来たる] (Boston: E.D. Abbott Co., 1978), 49.
 - 2) Abiko, *A Precious Legacy*, 49-50.
 - 3) Abiko, *A Precious Legacy*, 38-39.

キリスト教科学、根を下ろす

Christian Science Sentinel [クリスチャン・サイエンス・センチネル] のある記事には、ポイントンが湾岸地域でキリスト教科学に導かれることになった癒しが記載されている。その癒しは、彼女が日本における最初の教師としての任務を終え帰国した 1911 年から 1915 年の間に起った。彼女は、自分は「ひどい健康状態にあり、肉体的にも精神的にも破綻して、リウマチになってしまうのではないかと大いに恐れていました」と書いている。医学も自分自身の宗教も何の助けにもならないことがわかったとき、彼女は一冊の *Sentinel* [センチネル] を読んだ。これがきっかけとなり彼女はキリスト教科学の癒しを調べ始めた。彼女はその頃を思い起こし「この新しくも古い宗教を理解した時、私は癒され、社会に役立つ人材として、自分の場を見つけることができました」と書いている⁴。

彼女はこの新しく見出したキリスト教科学に対する愛を抱いて、1915年に二度目の航海に臨んだ。1920年代の初め、彼女は、日本の著名な政治家の子息、松方正熊の英語の個人教授をしていた。彼の妻、[松方美代](#)（1891-1984）もキリスト教科学の生徒であった。この二人の女性は、ともにこの宗教を愛して親しい友情を育てていった。やがて、1931年に、東京で最初のキリスト教科学小教会を創立するにあたり、中心となって働いた⁵。ポイントンは、東京で仕事をしていた1924年に第一科学者キリスト教会（母教会）の会員となった。

4) “The Lectures” [講演], *Christian Science Sentinel* [クリスチャン・サイエンス・センチネル], 1926年6月12日号, 812.

5) Abiko, *A Precious Legacy*, 22-23, 41.

松方は、米国でアメリカの教育を受けて育ったことに常に感謝していた。そして自分の子供たちも同じような教育を受けさせたいと願っていた。彼女はボイントン子供たちの英語の家庭教師として雇う決心をした。そして**キリスト教科学**を勉強していた他の家族もクラスに招待した⁶。その当時、『**科学と健康**—付聖書の鍵』を含め日本語に訳された**キリスト教科学**の文献がなかったことは特筆に値する。この宗教を勉強するためには英語を知ることが必須であったのである。

独特の資格をもった教師

日本式教育とは著しく異なり、ボイントンは英語を教えるとともに若い生徒たちにアメリカ文化の特質である自由と豊かに表現することも教えた。安孫子笑はこの子供たちの一人であった。彼女の著書、*A Precious Legacy: Christian Science Comes to Japan* [貴重な遺産：キリスト教科学日本に来たる]は一章全体をボイントンにささげ、彼女の授業が、いかに言語を教えることと**キリスト教科学**の真理を分かち合うことという二つの目的を持っていたかを如実に語っている。このようにして、子供たちはアメリカをルーツとする信仰の歴史と基礎を学んでいった。例えば、休憩時間には、ボイントンが作った、ボストンの母教会やマサチューセッツ州のメリー・ベーカー・エディの家、ニューハンプシャー州のメリー・ベーカー・エディの生誕した場所などの景色を基にしたジグソー・パズルで遊び、夕食の食卓の名札には、聖書や『**科学と健康**』の引用文が記されていた⁷。

6) Abiko, *A Precious Legacy*, 41.

7) Abiko, *A Precious Legacy*, 26-27, 50-51.

安孫子によると、ポイントンは「教育とは、神がすでに各々の子供に与えた善いものを引き出すことである」と信じていた⁸。松方ミエ（1922-1981）が、厚紙でできた美しいデザインのモデルハウスを家に持ち帰ったとき、ポイントンはこの若き生徒が跡見玉枝から正式な絵の授業を受けられるよう手配をした。跡見は日本で最も優れた芸術家の一人である。ミエ自身のちに著名な芸術家となり、アメリカで宝石デザイナー及び金物細工師として活躍した⁹。

ポイントンは、すみずみにまで注意を払った。そして、彼女の生徒たちにも、洋服にきちんとアイロンをかけることから勉強に至るまで、同じことを要求した¹⁰。彼女が規則やしつけにあまりにも厳格であったため、事件が起きたこともある。例えば、若き松方ハルが友人の家に綴り帳を忘れたとき、ポイントンは取りに帰るよう強要した。ところが、ハルが友人の家に向かっていて途中、強い地震が起こった。道は、崩壊した家々でふさがれてしまい、ハルの父親は彼女を救出するため出かけなくてはならなかった。ハルは、「ミス・ポイントンは、言葉にとっても厳しい先生でした。あれからというもの私は必ず自分のノートを授業に持って行くことにしました！」と語った¹¹。

8) Abiko, *A Precious Legacy*, 42.

9) Abiko, *A Precious Legacy*, 47.

10) Abiko, *A Precious Legacy*, 49.

11) Virginia S. Anami, *Nishimachi: Crossroads of Culture: A Historical Sketch of Nishimachi International School* [西町：文化の交差点：西町インターナショナル・スクールの略歴] (Tokyo: Nishimachi International School) 1982年.

生徒たちの目から見たボイントン

1923年9月1日関東大震災が日本を襲った時、東京のボイントンの家屋は大きく損壊してしまった。松方家の人々は、さしあたって一緒に住むようにと彼女を招待した。彼女はそれからというもの子供たちの教育を一手に引き受け、結局20年間松方家に住むことになった。特にボイントンの強い性格を考えると、松方美代にとり母親としてまた影響力のある者として役割を分かち合っ¹²てゆくことは、必ずしも容易なことではなかったと思われる。ミエは、それにもかかわらず母親が自分の子供の教育のために、どのような困難にも静かに耐えていたことを覚えていた。「一つの家族のなかに二人の女性が共に住むことを可能にし、子供の愛情を嫉妬したりむやみに求めたりすることなく、子供たちが教育を受け導かれ成長していったのは、明らかに母の寛大な精神の賜物¹³でした」。

松方は、子供たちが早く結婚できるように準備することよりも、子供たちの教育をはるかに尊重していた。彼女は、日本の親戚たちが長年培ってきた慣習に大胆に立ち向かい、彼らに自分の子供たちはアメリカの大学に留学させるとはっきりと伝えた。やがて、6人の子供たちはみな（一人の息子を含む）アメリカの中西部にあるキリスト教科学者たちの学校であるプリンシピア大学¹⁴で学んだ。

実際、ボイントンの生徒のうち13人がプリンシピアへ留学した¹⁵。彼女は、留学に備え、さまざまなことを十分に教えたが、子供

12) ハル・松方・ライシャワー著（広中和歌子訳）『絹と武士』（文芸春秋、1987）、19、20.

13) Abiko, *A Precious Legacy*, 51.

14) ライシャワー、『絹と武士』20.

15) Abiko, *A Precious Legacy*, 57.

たちの多くは、それでも二つの文化の板挟みとなり悩んでいた。松方ハルは、当時を思い起こし「自分が他の日本人とこうも違う育てられ方をしてきたことを、時々、恨めしくさえ思いました」と言った。「違うということで本当のアメリカ人にもなれないのなら、どうして普通に育てられなかったのかと考えました¹⁶」。彼女は、大学を卒業し日本に帰国して初めて、自分の国の歴史を徹底的に勉強し始めた。その中には、プリンシピア大学でアメリカの友人たちに説明できなかった詳細にわたる日本のことも含まれていた¹⁷。

ハルの回想は、ポイントンの教育にいくつか欠落している点があったことを示している。ポイントンは世界的視野に立つことを重要視し、それを教え込んだ。しかし生徒たちにとって日本の伝統がどのような意義があるかについては、十分に考慮していない時もあった¹⁸。同時に、生徒たちに世界情勢を知らせ、*The Christian Science Monitor* [ザ・クリスチャン・サイエンス・モニター] を読むよう奨励し、彼らがそれぞれの道をきちんと切り開くことができる準備をした。例えば、現在ニューヨークに住んでいる岡孝は、ポイントンに教えられたフランス語を用い、*The Christian Science Monitor* [ザ・クリスチャン・サイエンス・モニター] の記者として、初期のベトナム戦争の報道をした¹⁹。まだ出版されていない彼の伝記のなかで、当時を思い起こし「私がジャーナリズムと当時の政治事情に興味を持つようになったのは、ポイントンが政治的にも文化的にも時事問題を魅力

16) ライシャワー、『絹と武士』、21.

17) ライシャワー、『絹と武士』、24.

18) ライシャワー、『絹と武士』、24.

19) Takashi Oka, “Her lessons shape me still” [彼女の教えは今なお私を導いている], *The Christian Science Monitor* [ザ・クリスチャン・サイエンス・モニター]、2001年1月10日号、22.

的にまた生き生きと教えてくれたからである」と語っている²⁰。英語力が優れていたため、彼は日本で大学在学中に、東京裁判（極東国際軍事裁判）の6名の通訳の一人に選ばれた²¹。

ポイントンは1930年から1940年まで母教会の日本担当渉外部の任に就いた。この役割を通し、彼女は常に注意を払い**キリスト教科学**を公に紹介し続けた。

1940年頃アメリカ政府はポイントンに、すでに2年間にわたり戦争状態にあった日本を去るようにと勧めた²²。彼女はその勧めに応じ、二度と日本に戻ることはなかった。彼女は1942年4月7日に逝去した。それは、彼女が非常によく知るようになった国がパールハーバーを攻撃して間もなくのことであった。彼女が生徒たちを献身的に教え育てたことは、世界的キリスト教科学運動の歴史のなかで重要な記録として残されている。

関連した逸話：アナ・マロリーと横浜のキリスト教科学

「ホノルルに到着するまで、私たちは**キリスト教科学**が日本ですでに恒久的な足場を得ていたことを知らなかった、それで横浜に到着した時はうれしい驚きがあった。小さな集まりで教課説教が朗読されていることを知ったのである」。このように、軍人 K・D・グラントは、日本の横浜のグループについて1908年

20) Takashi Oka, "The Memoirs of Takashi Oka" [岡孝の思い出], unpublished manuscript, 52.

21) "Six Interpreters Chosen News Article" [記事選ばれた通訳は6人], The International Military Tribunal for the Far East, U.Va., 2015年11月14日号, <http://imtfe.law.virginia.edu/collections/phelps-collection/1/1/six-interpreters-chosen-news-article>.

22) Oka, "Her lessons shape me still" [彼女の教えは今なお私を導いている], 22.

10月のメリー・ベーカー・エディ宛の手紙に書いた。その後、このグループはキリスト教科学小教会として認可された。²³ *Christian Science Sentinel* [クリスチャン・サイエンス・センチネル] は、その後、次のような短い歴史を記載した。「横浜のキリスト教科学者たちは、1907年の復活祭の日曜日にグループのある会員の家で礼拝を始めた。出席者人数が増えたため、1919年に横浜キリスト教科学小教会を設立することができるようになった」。²⁴

横浜のアナ・マロリー（1857-1948）は、アメリカの女性で日本における最初のキリスト教科学実践士の一人であった。²⁵ マロリーの横浜での実践は、キリスト教科学に興味を示した欧米人に限られていたと思われるが、明らかに自分の第二の祖国を愛するようになっていた。彼女は1910年から1943年まで日本に住んでいたが、第二次世界大戦中に、アメリカに強制送還させられた。

彼女は、1923年の関東大震災のときにいかに神に守られたかについて証しているが、この証はマロリーが神を信頼し日本を愛したことを物語っている。その証を読むには[ここ](#)をクリック。

23) “Letters to Our Leader” [「私たちの指導者への手紙」], *Christian Science Sentinel* [クリスチャン・サイエンス・センチネル], 1909年1月9日号, 371-372.

24) “Japan” in “Extracts from Reports of Christian Science Committees on Publication” [「キリスト教科学渉外部報告の抜粋」]に記載された「日本」, *Christian Science Sentinel* [クリスチャン・サイエンス・センチネル], 1936年5月23日号, 749. *The Story of Christian Science Wartime Activities* [1939-1946 戦時のキリスト教科学活動についての逸話] (Boston: The Christian Science Publishing Society, 1947年) は、小教会は1940年に政府当局から強制的に解散させられたと記している (298)。この小教会が再開されることはなかった。

25) 最初の実践士は東京在住のいくた・ぜんじろう (1881-1944) で、*The Christian Science Journal* [ザ・クリスチャン・サイエンス・ジャーナル] に1938年まで登録されていた。彼についてはほとんど知られていない。国勢調査の記録によると1920年代に日本に戻るまで、長い間アメリカ市民であったと記録されている。

86才でアメリカに帰国する際、マロリーはスウェーデンのグリプスホルム号に乗船した。「復員輸送艦」としてチャーターされていたため、戦争犯罪を起こした軍人も、民間人も交換することができたのである。何百人というプロテスタントやカトリックの宣教師たちとともに、インド洋を渡り、喜望峰をまわって大西洋へと航海した。この長い航路は太平洋を横断するより安全であると考えられていた。²⁶

アメリカ到着直後、*The Christian Science Monitor* [ザ・クリスチャン・サイエンス・モニター] は、マロリーとルラ・ドウィットと会見した。ルラ・ドウィットは、キリスト教科学小教会の創設者のひとりであり、横浜に住んでいた。この記事は、長い間故郷とみなしてきた地を離れなくてはならないことが、ますますはっきりと分かってきたときでさえ、彼らは確固たる愛をもって、さまざまな挑戦に対応していたと、記している。記事全体を読むには[ここ](#)をクリック。この記事には、戦時下にあつてこの二人の女性たちが数々の困難にどのように対処したかについての興味深い逸話も含まれている。会見者は、「二人は日本での長期滞在について、思いやりのある思い出しかもっていなかった」と結んだ。²⁷

アメリカに帰国した後、アナ・マロリーは残りの人生をニューハンプシャー州コンコードのプレザント・ビュー・ホームですごした。その当時そこは、**キリスト教科学**のために奉仕し、退役した人々のための施設であった。

26) この航海についての詳細は次の記事を参照。“1,440 on Gripsholm Wildly Happy Here: Reticent on Trials” [1440人グリプスホルム号にてアメリカに到着、熱狂して喜ぶ: 苦難については語らず], *The New York Times* [ニューヨークタイムズ], 1943年12月2日号、1、18.

27) Barbara E. Scott Fisher, “Two Repatriated Americans Can Look Back With Pleasure at Long Sojourn in Japan” [祖国へ送還された二人のアメリカ人、日本での長期滞在を喜びをもって振り返る], *The Christian Science Monitor* [ザ・クリスチャン・サイエンス・モニター], 1943年12月7日号、13.